
〈最終講義〉

チェ・ゲバラとオードリー・ヘプバーン

—— 戦争・貧困・平和 ——

Che Guevara and Audrey Hepburn

—— War, Poverty, Peace ——

高 懸 雄 治

目 次

- I. 「革命の英雄」と「永遠の妖精」
- II. 戦争・貧困・平和のトライアングル
- III. チェ・ゲバラと戦争・貧困・平和
- IV. オードリー・ヘプバーンと戦争・貧困・平和
- V. 21世紀のチェとオードリー

今日は、学外からもお越し戴いていると言うことで、学生の皆さんは戸惑っているかも知れませんが、最終講義というのは、定年で辞める教員に対するはなむけの儀式なんです。私にも、こういう日がやってきたんですね。今日は、オープンですので、いつになく緊張してしまして、この31年間でもなかったことです。それで、今日は最終講義と言うことですが、「途上国経済論」の最後でもありまして、先週までは貧困のことを論じてきましたので、その延長でここでも貧困の問題を中心に、しかも、私が個人的に関心を持ってきた、この二人と関連づけて是非話しておきたい、との思いでこのテーマを選んだわけです。

I. 「革命の英雄」と「永遠の妖精」

先ほど、平澤学部長からもお話がありましたけれども、今年は、この二人が偶然にも生誕80年で重なります。配布したレジユメの一番最後の所に年表があります。この二人は1928年と29年生まれなのです。今年はオードリー・ヘプバーンの、去年はチェ・ゲバラの生誕80年になります。この間、各誌は各々を特集しています。ということで、私の今日のテーマは、思いもよらない偶然と重なったことに驚いています。先ほど学部長から話しのありました、チェ・ゲバラの映画『チェ』ですが、私もそれを初日に観ました。これがパンフレットです。この『ブルータス』は特集をしております、「男が惚れる男ナンバーワン」はゲバラです。それから、オードリー・ヘプバーンに関しては、『文芸春秋』に「読者投票による20世紀世

界の美女」というアンケートがありまして、オードリーはダントツのナンバーワン。他の調査でも、オードリーがナンバーワンです。何故か、日本人はオードリーが好きだと言われていますが。

この両者は、去年と今年で生誕 80 年を迎えています。1928 年、29 年と言いますと、世界大恐慌の年であります。まさにオードリーはこの年に生まれ、チェはその前年に生まれている。いま、世界と日本の現状は、それに匹敵する「100 年に一度の金融危機」と言われていますが、これから更に悪化するんじゃないかと思えますけれど、同じ状況下に二人は生を受けたという点でも、私たちにとっては身近な存在だと思っています。さらに、今年の元旦はキューバ革命の 50 周年にあたります。

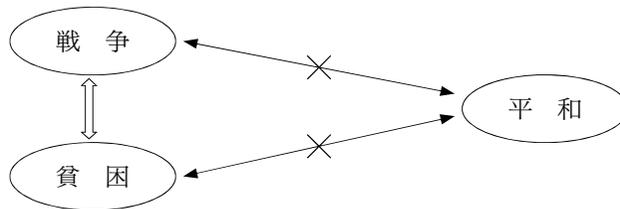
「革命の英雄」と「永遠の妖精」と呼ばれている二人の 80 年ということなんですが、ゲバラの本名は、エルネスト・ゲバラ・デ・ラ・セルナ。「世界一カッコいい男」(ジョン・レノン)、あるいは、サルトルは「20 世紀で最も完璧な人間」と賞讃しました。映画『チェ』のキャッチフレーズには、「20 世紀最大のカリスマ」と書いてあります。いろんな彼に対する呼び方があるわけですが、アルゼンチン生まれの、どちらかという中産階級の子どもであったわけです。

それに対して、オードリー・ヘプバーンはベルギー生まれ。私のゼミの女性二人が 2 年ほど前に中国へ語学研修に行った時に、中国版のオードリー写真集を買ってきたんですが、そこにはこう書いてあります。「精美切割的钻石」。「非常に美しく磨き上げられたダイヤモンドのようである」と言うのです、日本でも、彼女の写真集や女性向けの本が沢山ありますね。例えば、『エレガントな女性になる方法』、『おしゃれレッスン』等々。そこには「妖精のような美しさ」だとか、「少年のような無邪気さ」だとか、「貴族のような気品」とか、そういう言葉が並んでいます。

さて、一方は「革命の英雄」、他方は「永遠の妖精」、しかも魅力的な男と女、そして、いまなおクローズアップされる二人。その秘密は何か、と言うことは、この講義の最後に解ってもらえると思います。先ほど学部長も言われましたが、「このテーマは、ミスマッチじゃないか？」というのが、私が他の教員からも職員からも受けた質問でした。多分、皆さんもそう思うと思いますが、あえて問題にしていきたい。これはギネスブックものだと思っています。日本でも世界的にも、こういうタイトルの論文・報告等はないだろうと思っています。関心があったら調べてみて下さい。おそらく、世界でも初めてと自負している訳です。

II. 戦争・貧困・平和のトライアングル

次に、「戦争・貧困・平和のトライアングル (三角形)」—— この表現は私のものですが—— について考えてみたいと思います。「戦争と平和」は対の概念として考えるのが一般的であって、私達の学生運動の激しかった時代に「反戦平和」というのがスローガンにありました。デモ隊にも加わりました。この時代の「戦争と平和」と言うのは安保改定やベトナム戦争もあって、あまりにも強烈なイメージでした。「ギリシア喜劇」に「平和」(アリストパネース)という戯曲があって、ここでもやっぱり、戦争と平和を主題としたものが「平和」というタイトルであります。そうしますと、平和に関しては、古代から現代まで戦争との対として言われてきたんだと思います。私は、それに対して違和感がありました。というのも、私はメキシコに8回以上行っております。中米の危険な所のエルサルバドル、グアテマラ、ニカラグアの現実も見てきました。現在でも、メキシコでは一方で超高層ビルが並ぶ中で、依然として路上で物乞いをしている人々、地下鉄(メトロ)に乗れば、車中でギターを弾いたり物を売ったりすることが日常的になっています。そうしますと、これが「平和」なのか、と絶えず疑問に思っていました。



そこで、反戦、反貧困が平和であるという点で言いますと、ここに三角形の図を示しておきましたが、これは二等辺三角形になると、私は考えています。正三角形ではない。戦争と平和、貧困と平和は限りなく遠い、しかし戦争と貧困の間は限りなく近い、という意味でこういう図を描きました。ノルウェーの平和学者のヨハン・ガルトゥングは、ここに居る方のほとんどが名前も知らないだろうし、私も知らなかった。彼が、1969年に「暴力・平和・平和研究」という論文を発表しまして、その中で「構造的暴力」という概念を初めて使用したんですね。暴力には、戦争のような「直接的暴力」と「構造的暴力」の二つの面がある、と言うのが彼の考え方です。「構造的暴力」とは、社会構造の中に組み込まれている格差、貧困、不平等というもの、これは、経済的な側面と言いますと収奪とか搾取とかそういう言葉を使いますし、政治的な側面になると抑圧とか植民地支配とかそういう言葉を使います。つまり、社会構造の中に組み込まれたこういう格差、貧困、差別は、「構造的暴力」と言っているんだという問題提起なんです。いまから40年前に、平和という問題を戦争という問題

とだけではなくて、貧困という問題からも論じなくてはいけないと言うことを、既に述べていたと言うことになります。

それから、講義でも話しましたが、アマルティア・センの「人間の安全保障」あるいは「人間的発展」と言うことであります。普通、「安全保障」と言いますと国家の安全保障、例えば「日米安全保障条約」といった国家のレベルで言っている問題でしたが、ここでは「人間の」という形容詞をつけて、国家の、軍事のレベルだけではなくて個人レベル、あるいは国民の「安全」保障が重要であると考えます。それは飢餓とか貧困、エイズ、自然災害等々の問題から人間個人を守らなくてはいけない、これが「人間の安全保障」という考え方です。「人間の発展」も、普通は経済的発展というのが常であります。それに対して、あえて「人間的」という点を強調しているわけです。「人間の発展（開発）」には、一人当たりのGDPの指標が入ってきますけれど、決定的ではない一つの項目。優先順位としましては、平均寿命・余命、あるいは識字率、就学率。こういう問題と同列に一人当たりのGDPが入る、そういう考え方です。これは、必ずしもA.センの考えたことじゃありませんで、ユニセフとか国連開発計画の報告書などでも指摘されてきたことです。人間の生命の安全、社会の安心とそして生活の安定、これらを拡大することが「平和」であると考えているのでしょう。したがって、レジユメに示したユニセフの「世界子ども白書」の中の一文は、こういう流れで言われています。1990年代は「貧困、紛争、社会の慢性的不安定化、エイズなど、女性、若者、子どもに対する宣戦布告のない戦争の10年だった」。こうした点から言いますと、戦争が貧困と言う問題と結びついていると思っております。

最近、堤未果さんが『ルポ・貧困大国アメリカ』（岩波新書）というのを書いていまして、彼女も戦争があるから貧困が起ると考えていた。しかしアメリカの現実とは違う、逆である。アメリカでは、まず貧困層から軍隊でイラクで働く人々をリクルートしている、と言うことを実際に高校を取材して明らかにしたんですね。大学へ行けない、就職できない貧しい家庭の子どもたち、これをリクルートして就職勧誘して軍隊に入れる。そして、奨学金を出すとかいろんな好条件をつけ、イラク等に派遣して前線に投入する。しかし、結果的に約束は守られないという実態を明らかにしたわけです。ここでも、実態として、戦争と貧困と平和の問題が結びつくということが語られている訳です。こういう現実があつて、最初に申しました反戦＝平和と簡単には言えない状況が、私達の周りに作られていることを、まずは確認してほしいと思います。

III. チェ・ゲバラと戦争・貧困・平和

次からは、本来の主題に入ります。最初に、チェ・ゲバラと戦争・貧困・平和との関係はどのようなものかということになります。これは皆さんは観たかどうかですが、いま、映画

「チェ」の第一部が上映されているわけですけど、これは今月の30日から第二部が上映されて、最後に銃殺で死ぬところまでを描くものでありますが、第一部では、キューバ革命が成功するところまでの前半を描いています。以前に彼の映画が日本でも公開されて、これがブームになりました。2004年10月に公開された「モーターサイクル・ダイアリーズ」、おんぼろオートバイで南米を縦断旅行した時の一部始終を映画化したんですね。現在は角川文庫でしょうか、簡単に本は手に入り非常に面白い。皆さんと同じまだ大学生だった、プエノスアイレス大学の医学生だった彼が貧乏旅行をする。このレジメの最後に南米の地図をつけてありますが、彼は二回貧乏旅行をするんですね。右側が1回目、アルゼンチンから上にあがって行きます。約7か月間を貧乏旅行します。2回目、大学を卒業して医学博士になるわけですが、これが左側の図になります。2回目は結局アルゼンチンに戻ってくることはなかった。メキシコからキューバに入ってキューバ革命に、という事態になったからです。

ところで、「チェ」というのは本名にもない。これは、あだ名であります。スペイン語で「ねえ、君」というような呼びかけの言葉であります。メキシコでは聞いたことがありません。つまり、これはアルゼンチンの特定地域の方言なのです。したがって彼は、アルゼンチン時代にはチェと呼ばれておりません。メキシコに入ってそこで活動するわけですが、この男は、「チェという不思議な単語を使う」と言うことで、それ以来、彼の本名に代わって付けられた名前になってしまったわけですね。いまでも、メキシコでもゲバラとは言いません。「チェ」と言えば、ゲバラのことなのです。

さて、チェ・ゲバラの写真ですけれども、これは、アルベルト・コルダの写真として有名なものです。「20世紀最も世界に普及した写真」と言われています。それは何故かと言いますと、カッコいい。ジョン・レノンも言ってましたが、彼はなかなかのハンサムなんですね。だから女性にも持てた。「現代のモナ・リザ」とも言われている訳ですが、遠くを見つめる謎めいた目差しがモナ・リザに似ている、しかも憂いを含んでいる。これは隠し撮りなんですね。意識して彼はカメラに映ったのではなくて、コルダが望遠レンズで一瞬のゲバラを撮った写真、したがって全然作った顔じゃない、ポーズをとったのではない。ところが、これが素晴らしい写真に出来上がったわけです。この「英雄的ゲリラ」と言う写真が、ゲバラのトレードマークとなり、Tシャツの顔となります。余分な話ですけれども、世界的に最も普及したのは何故かと言いますと、キューバは著作権、写真の著作権を取らなかったんですね。キューバにとっては、普及してくれることはありがたいことだったのですが、先進国は勝手に使ってそれによっていろんな形のグッズが出て大儲けしたわけです。そこで、最近キューバも著作権所有を言い始めたんですね。

ゲバラは大学で医学博士を取ります。したがって医者なんですね。実際、1回目の貧乏旅行をした時にも、ハンセン病の患者の施設を訪ねてボランティアで治療に当たっています。

例えば、この時の話として映画「モーターサイクル」にも出てくるけれども、彼は、施設から渡されたゴム手袋を拒否してハンセン病患者に会っており、皆から慕われたということが出てきます。彼は、医者になって人間の病を治さなきゃいけないと思ったんですね。それは何故かと言いますと、彼は、4歳頃に重い喘息にかかっていたからです。これに彼は一生悩んでいた。しかもキューバの場合も、ボリビアでも、いずれもゲリラ戦を戦うわけでジャングルに入る。医薬品は十分ではない、発作が起き、咳がとまらない。そうしたら、すぐに敵に見つかって非常に危険な状況になる。ジャングルですから湿気が多い、あるいは環境が悪い。健康体ではない彼が、過酷に挑んだことにも気づいてほしいですね。

レジュメに「悪がきエルネストから革命家チェへ」と書きましたが、「悪がきエルネスト」と言いますのは、彼が母親に手紙を書いた時に、自分は若いころには悪ガキであって、お母さんには大変迷惑をかけて世話になったということを書くんです。彼は、二回の貧乏旅行を経ることによって人間の病を治す医者から社会の病を治す革命家へ、エルネストからチェへ大きく成長した。それは、皆さんのような若い世代の出来事が、大きな契機になっていくということでもありました。「医師の任務について」という、彼が、自分の過去を振り返って医学生に話した内容の中にこういう言葉が出てきます。「その時私は、有名な研究者になるとか、医学の世界で重要な業績を残すとか、と同じくらい大切な何かがある、ということに気づき始めた。それは、そういう人々の力になるということだった」と。これは、若き日の南米旅行で自分が大きく変わったことを振り返った言葉であった。いかにこの大陸の人々は貧しいか、差別をうけているか、あるいは抑圧に耐えているか。病気になっても、それを治す所も金も保障もないという悲惨な状況を、彼は目撃するわけですね。彼の家庭は中流でしたので、そして喘息でしたから、気候の良い所に両親はあれこれ住む場所を変えています。そして医学部に入る。いわば世間知らずの彼は、南米大陸の現状をみて自分の成すべき事は何か、ということを知ったわけです。

さて、その後のチェ・ゲバラの考え方をみたいと思いますが、彼は、国連演説で先進国の批判をします。なぜ先進国批判なのか。以前の講義でも話しましたが、私たちは植民地時代を知らない。つまり日本は植民地になったことがない。『一度も植民地になったことがない日本』という本があります。欧州で生活しているデュラン・れい子さんが書いたものです。日本には独立記念日がない。何故ないのか。何故、建国記念日なのか、ということなんですね。独立記念日がないということは植民地になったことがないんでしょう。アメリカだって独立戦争を戦い独立宣言をするんです。多くの国は、かつて植民地だった。アフリカ大陸も南米大陸もアジアもほとんどそうである。そうしますと南米大陸、現在でも貧富の差が激しい大陸と言われてきた南米の現状は、当時なおさらひどいことになっていたと思いますが、彼は、悲惨な状況を見て「完全な主権の確立と発展可能な価格体系」を強く主張します。多分、そ

の考え方の基本にあるのは低開発と従属、その結果おこる政治的な抑圧と経済的な収奪。つまり反帝国主義、新(旧)植民地主義への批判だろうと思います。

もう一つ、彼は、経済学者チェ・ゲバラとも呼ばれますが、「国際価値論」という難しい問題にも論争を挑みます。「南北間での互惠貿易」は不等価交換ではないか、と。不等価交換かどうかは、日本でも論争があって不等価交換ではないという考え方が主流ですが、しかし、私は非常に疑問ですね。理論では不等価ではないと言うけども、しかし、実際は不等価と言わざるを得ないというのが私の実感であります。100円ショップを考えてください。何故、あれだけのものが100円で買えるか？ メイドイン・タイとかチャイナとか書いてありますけれど、これはチェ・ゲバラの言った不等価交換じゃないか、収奪ではないかという途上国側の考え方が、実感としては受け止められるのです。

今回の映画「チェ」のコピーは「かつて、本気で世界を変えようとした男がいた」と言うものです。いま「チェンジ」という言葉が言われていて、アメリカの大統領に就任するオバマのキャッチフレーズも「チェンジ」。「変革」という言葉は南米では当たり前ですね。スペイン語では「カンビオ cambio」と言います。ペルーの大統領に当選した日系人のフジモリも「カンビオ」と言いました。中南米ではもう20年近く前からこの「カンビオ」という言葉によって「変革」を意識してきたわけです。日本でも小泉さんが「構造改革」を言いましたが、その結果はいまの状態になったわけで、変革と言えば全て良いことになるとは限らないということは、皆さんに知ってほしいことでありますけれど。ゲバラは、彼の時代に「チェンジ(カンビオ)」を語り実践しました。

レジュメに書きました「革命による平和」というのはゲバラの言ったセリフではなくて、ロマン・ロランの言葉なんですね。私達の世代には、ロマン・ロランの大河小説『ジャン・クリストフ』は青春の必読書だったわけですが（ノーベル文学賞をとったと思います）が、この作家ロマン・ロランが1935年の社会的な評論を書いた時に、このタイトルをつけたんですね。つまり、平和を獲得するためには、社会の根本から変えなければ駄目だという考えですね。「平和は社会組織の変革なしには真実なものとはなりえず、また安定したものともなりえない。だから革命による平和を」というのが彼の主張であります。ロマン・ロランとチェ・ゲバラがどこで繋がるかは分からないが、少なくとも、社会変革によって途上国の運命を変えなければならない。あるいは、それを先進国を含めた全世界にという考え方があるわけですから、そうしますと、それは単なる政策的な変革では駄目だと言うことでしょう。社会構造を根源的に変えていく、ということではないかというのが私の解釈であります。

ところで、日本のことと関係して、ゲバラの広島訪問というのは案外知られてないのですが、実は1959年に彼は来日をしておりまして、大企業のトップ連中と経済交渉を行ってあります。そして、その途中で突然予定を変更して、広島へ行くんですね。ですから、ほとんど無

警備のまま彼は行く。慌てて県の担当者がそれに同行するという形をとったそうです。原爆記念館と資料館を時間かけて視たんです。その時に、彼はこういうセリフを同行した日本人に対して英語で言ったといえます。「君たち日本人は、アメリカにこれほど残虐な目に会わされて、腹が立たないのか」。県の職員はこれには絶句したと言います。そこで思い出しますが、2007年6月でしたけれども久間防衛大臣は何と言ったか。後に辞任することになりましたが、「原爆投下はあれで戦争が終わったんだ。だから仕様がなない」。これは、ゲバラが言ったことと正に逆の言葉であります。皆さんはどう思いますか。

さて、ゲバラの娘アレイダさんが去年明治大学で講演をしました。彼女は広島にも行きました。それは、父親であるチェ・ゲバラの遺志でもある、平和のためにはその象徴・広島に行きなさいという手紙を、当時ゲバラは家族に残している。実は、私は思わぬ形でこれに関係したんですね。私がテレビに登場したんです。その時、私は東京で学会があって出張していました。それで、私は5月11日の講演会に行きました。土曜日でした。これが満杯なんですね。別の部屋でもテレビでやりました。私は「北海道から来たんだ」と言って第一会場に潜り込みました。休憩のためロビーにいますと、あるテレビ会社が私に声をかけて意見を求めたんですね。それで、私は興奮して「北海道から来たんだ」と言い自分の思いを、何故チェ・ゲバラなのかということと話したんです。どんなことを話したか、はもう覚えていませんが。その後私は忘れていたのですが、ある時、札幌の知人2人に別々に言われました。「先生、出てましたね」。それは「みのもんたの朝ズバ!」ですが、私は、これを見たことがありません。アレイダさんは、やはりゲバラの娘でして、演説が素晴らしいのです。「世界に飢えや差別や貧困があるかぎり、平和とはいえない。必要なのは連帯だけだ」と。父親のこともあったのでしょう。小児科医として世界を駆け回っていると言うことでありました。

IV. オードリー・ヘプバーンと戦争・貧困・平和

さて、時間が無くなってきますので、次に、オードリー・ヘプバーンのことに関して話したいと思います。ここに書きました『オードリースタイル』という本がありますが、これは是非若い女性に読んでもらいたい。そのサブタイトルは「エレガントに、シックに、シンプルに」です。多分、オードリーのファッションの魅力というのは、この三点になるんじゃないかと私も思う訳です。ファッション・デザイナー森英恵さんも同じことを言ってますね。「オードリーのファッションは素晴らしい」と言って、ハリウッドのゴージャスとパリのシック、その基調はシンプルである、と。ファッション界でのオードリーの評価は、大体こういうことになるんだろうと思います。若い女性の皆さんには是非これを参考にして欲しい。しかし、これは難しい組み合わせになるかと思いますが。

さて、このオードリーが世界的な脚光を浴びますのは、映画「ローマの休日」でした。私

は、今から5年前、2003年の10月から2004年の2月にかけて札幌で4回見ました。これは新しいデジタル版なんですね。何回みても「また観たい！」ということで、それくらい素晴らしいアン王女のヘアバーンだったわけです。ご存じの方も多いいと思いますが、単純なおとぎ話。王女アンが無名の新聞記者と1日の恋に落ちるという話で、現実には有り得ない。そして、当然のこととして最後は悲劇として終わる訳ですが、しかし、終わり方が素晴らしいんですね、最終場面が。オードリーの母親は元々は貴族の末裔、男爵なんですね。その点でいいますと、オードリーもゲバラと同じように中産階級の家系ですが、実は没落貴族だとも言われた。ですから、母親はオードリーに対して子どもの頃から節約の生活をさせたと言います。さて、バレリーナを夢みてロンドンにいた無名の少女が、突然、この映画がヒットすることによってハリウッドに登場するんですね。そしてアカデミー主演女優賞を受けるのです。当時は、マリリン・モンローが全盛の時代だったわけですが、グラマーとかセクシーのシンボルとしてのマリリン・モンローを押しつけてしまう。全然それとは違うタイプの、ある意味では少年ばい体つきの痩せっぽっちの女が突然ハリウッドを支配し、世界の恋人になる。

日本でも、この映画が流行した時にショートカットが全盛だったんですね。そのヘアスタイルというのは未だに私も記憶があって、そのイメージは、オードリーのこの映画にあるんです。だから、「君の名は」の真知子巻きと同じように、ヘアバーンのヘアスタイルが流行った、誰もがショートカットにした時期があった。実は、「ローマの休日」というのは単なる恋物語ではなくて、その裏には、この時のアメリカの政治・社会情勢が反映していたということも知ってほしいんですね。マッカーシー旋風とこの当時言われましたが、マッカーシー上院議員によるレッド・パージ、左翼主義者に対する弾圧というのがこの時アメリカを支配して、ハリウッドでもそれが行われていたということです。「ローマの休日」を書いたのはドルトン・トランボという人なんです、当時、彼はこの名前では脚本等を書けなかったんですね。ペンネームを使って書いた。その一つが「ローマの休日」で、デジタルのDVDはこの本名に戻って印刷されていますが、当時は、この名前では発表できなかった。

さて、戦争とオードリーの関係で言いますと、第二次大戦下のオランダということが重要な役割を果たすんですね。彼女は10歳の時、1939年にオランダの母親の所に移る訳です。それまではイギリスにいたのですが、転々とするんです。最後はスイスの自宅で死亡するのですけれども、そういう点でもゲバラと非常に似ていて、国際的な側面を持っていた。第二次大戦が始まってイギリスでは危ない、オランダが安全だという母親の考えから彼女はオランダに渡るので。ところが、これが大変な誤算だった。オランダはまもなくヒトラーの制圧下に入ってしまうということで、飢餓と病気が蔓延するオランダ。その時に10歳のオードリーはどういうことをしたのか。レジスタンス(抵抗運動)に、彼女は子どもな

がら協力するんですね。秘密文書の伝達の役割を引き受けていた。母親もそういう考え方であったと思いますが、父親は違った。どちらかというとなチス協力者であったと言います。子どもの時に離婚していますが。そしてある時、ドイツ兵に連行される寸前になるんですね、この役割を果たしている時に。ですから、映画「アンネの日記」のアンネ役がきたときに、彼女はこれを拒否するんです。アンネの生年月日は1929年の6月ですから、オードリーとほとんど1カ月しか変わらない。アンネも4歳の時にオランダのアムステルダムにいます。オードリーも同じオランダに行き、ヒトラーの支配下に入ります。アンネ・フランクは屋根裏部屋で身を潜める。そして15才の少女は、収容所で悲壮な最後を遂げ、「アンネの日記」が有名となる。オードリーは何故、この「アンネの日記」の主役を拒否したか。それは、自分の身に起こったことと完全に同じだった、アンネの経験したことは私の経験したことでもあった、アンネの運命は私の運命だったかも知れない、ということ、オードリーはずっと思い続けるんですね。そして、この役は絶対にできないと拒絶をするのですが、その後、1990年にはイギリスのロンドンを始めとして、「アンネの日記」の朗読とコンサートを開いた時には、朗読等を引き受けておりますので、ある程度吹っ切れたんだと思います。

晩年、彼女はユニセフに関わって行くわけですが、何故ユニセフなのか。実はユニセフの前身アンラに、オードリーは助けられたんですね。第二次世界大戦直後に、このアンラが食糧、医薬品、衣類などの生活必需品の物資援助をしました。それを一生忘れなかったと言うことが、このユニセフの活動に繋がっているという訳です。1945年に終戦となりますが、この時彼女は16歳だった。その時すでに168cm、これは非常に高いですね。でも、これは彼女にとって非常に悩みだったんですね。彼女が困ったことは何かと言いますと、バレリーナを目指していたからです。バレエの主役を彼女は夢みていましたが、とてもこんな大きな子は主役にはなれない。男のダンサーが持ち上げられない、あるいは、余りにも大きすぎて可愛さがない。結局、これで挫折をしますけれども、長身であった故に自分の夢を果たせないという、悲惨なことが起こったのです。

その時の体重は41kg。オードリースタイルとして憧れられる彼女の細身は、実はこの頃の原因があります。彼女は太れなかった。それは子ども時の悲惨な状況のせいで、その後、拒食症、あるいは過食症の症状が出てくる。結局、あの細身のスタイルは自らダイエットして作った訳ではない。ある意味では、悲惨なことが結果オーライという形になっただけの話だったんですね。そういう過去のことがずっと彼女の中にはありまして、59歳の時にユニセフから親善大使の提案があった時に、引受けを即答したと言われております。オードリー生誕80年を特集した映画雑誌に載っていたんですが、ユニセフ親善大使のこと、その時の条件が書いてあるんですね。親善大使の年間給与はいくらか。年間1ドル、これはもうゼロに等しい。つまりボランティアである。それを4年間も続けた。世界の飢餓地域を飛び回りましたが、

その時の条件はホテル代以外は自己負担、つまり航空券代も自己負担、それも基本的にはエコノミーだった。ハリウッドのトップスターになった彼女がこういう立場を受け入れて、子ども達のために、その飢餓改善のためにこういう形で身を投じた。と言うことは、これは天国から地獄へと言いますか、全然違う環境の中に身を置いた、ということでもあった訳です。

これには、映画「尼僧物語」が非常に影響していると言われます。これが、この映画の写真ですが、修道院で働いているシスター・ルーク（オードリー）がアフリカのコンゴで子どもを抱いている写真。そしてこの写真は、ソマリアの難民キャンプで、目が見えない状態の子どもを抱きかかえています。「尼僧物語」は1959年、いまから50年前に撮影されていますが、その時既にオードリーの生涯は暗示されていたと言われていています。彼女はこう言う決意をした。つまり、子どもたちのためになるならば、私の世界的に有名な名前を利用してもいい、子ども達のために役立つならその宣伝塔になろう、という発言をしております。ハリウッドの大女優が年間1ドルの親善大使ですから、最初は不信に思われたんですね。売名行為じゃないかとも言われたが、強い意志が、彼女にはあったのです。

親善大使オードリーが国連加盟国に呼びかけた「声明文」があります。それは、先進国、途上国両方を批判し、「貧困は人災であり、その解決は平和であり、その実現は人間の義務」であると訴えた「GNPの1%を途上国開発基金にあてよう」という文書です。これは見事で感動的な文章です。ここには、彼女の想いが込められているように思います。彼女は、全くのボランティアとして四年間に8回悲惨な国々を訪ね、膨大な戦費を少しでも子ども達に、と訴えました。最近の統計を見ますと、アメリカのイラク・アフガンの戦費としましては、平均すると3兆ドルに達するだろうと言われていています。アメリカのノーベル賞経済学者スティグリッツの本に出てきます。それから、昨年の世界の軍事費は1.4兆ドル、日本の防衛費は436億ドルということです。国連の「ミレニアム開発目標」では、2015年までに現在の貧困・飢餓状況を半分にすることを宣言しておりますが、大体それに必要な費用は700億ドルから1千億ドルです。そうしますと、この戦費はどれほど巨額のものか。そこからわずかを支出すれば、オードリーはGNPの1%を、と言いましたが、貧困からの救済は可能なのだと言うことを、是非知ってほしい。

V. 21世紀のチェとオードリー

さて、最後は、21世紀のチェとオードリーという形でまとめたいと思います。レジュメに絶絶・非業な最期と書きましたが、ゲバラはキューバ革命後、国立銀行総裁、それから工業大臣等を30歳そこそこでなり、その後、カストロに別れを告げてコンゴに渡り、それからボリビアでゲリラ戦を戦います。そして、ボリビア政府軍に銃殺されて39歳の生涯を終えました。オードリーも、最後は末期がんなんですね。ソマリアからの帰国後、腹痛を訴えて精密

検査を受けたところ、末期の結腸がん。どちらも銃殺、末期がんという形で、ボリビアのジャングル、あるいはアフリカのソマリアの難民キャンプでの仕事をする中で生涯を終えたのです。

レジュメの「ロシナンテの肋骨」というのは、ゲバラが両親との最後の別れとしてボリビアに入る時の別れの手紙に出てくるのですが、自分をドン・キホーテに例えるんですね。ロシナンテというのは、ドン・キホーテが連れていた愛馬の名前です。「これが最後の旅になる。最期になるかもわからない」と言うことで、手紙を出すんですね。そこに「あるべき姿のために」と私は書いたのですが、これはミュージカル「ラ・マンチャの男」(松本幸四郎の当たり役ですが)に出てくるセリフだと言われています。私はまだ観てなくて、パンフレットだけは取り寄せていますけども。ラ・マンチャの男(ドン・キホーテ)が言うセリフがあります。狂気とは何か。「最も憎むべき狂気は、ありのままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」。あるべき姿のために、理想のために戦わないこと、これこそが狂気であるというのです。これは、まさにチェ・ゲバラに当てはまる生き方だろうと思っています。

次の、妖精から天使へ。これはオードリーのことですが、「ローマの休日」の時に「銀幕の妖精」と言われたんですね。そして私から言えば、最後は「エンジェル」で終わった、と思うのです。レスリー・キャロンという女優、この人がこう言っています。「オードリーの生涯は第二章にわたります。第1章はあらゆる栄光を獲得したオードリー・ヘプバーン。しかし、第2章では自分の全ての栄光を還元した」。そして「欠けているのは人の意思と関心」と言うのは、オードリーの「声明文」の中で出てきますけれども、「私達の小さな一歩が世界を変える」と言うこともでてくる言葉ですが、実は、平和あるいは貧困の解決は、これは、お金とかそう言うことだけではない、「欠けているのは人の意思」と言うのです。例えば、昨年のノーベル平和賞を受けましたアハティサーリも「平和は意思の問題」だと言っています。それから2006年ノーベル平和賞のムハマド・ユヌスは『自伝』の中で「世界が貧困を根絶するためには意思が問題」だと言っております。昨年、イギリスの首相も意思の問題だと言っています。経済学者で有名なジェフリー・サックスも『貧困の終焉』という本の中で、「一人一人が意思をもって取り組むことだ」と述べています。いま四人の名前を挙げましたけれども、彼女が言ってることの正しさが、証言されているんだと思います。

さて、「最底辺の10億人」ということが言われてまして、1日1ドル、世界の貧困人口というのは10億人いる。それに対して現在の世界人口は67.5億人、そうすると、6人から7人のうちの1人が世界の最底辺の飢餓状況にあると言っていると思いますし、統計上は3秒に1人、子ども達が飢餓状況の中で死んでいるとも言われています。そういう現実はいまもなお続いている。そういう点で言いますと、突然で違和感があるかと思いますが、日本国憲

法のことです。「第9条」、これだけが突出して語られますが、もう一つ重要なのは「第25条」である。第9条は、これは戦争の永久放棄というわけですけど、第25条は、これは生存権という形で健康で文化的な最低限度の生活を営む権利があると言う。この考え方は、我々日本国民だけではなくて、世界全ての国民にも適応できるスローガンであると思うのです。

最後になってきましたが、ノーベル物理学賞を受賞した益川敏英先生は非常にユニークな方で、私は英語が喋れなくて日本語です、と言ったり、非常に茶目っ気があり人気者であります。この益川先生は、ノーベル賞を受ける直前の記者会見でこう言うことを述べたんですね。それは「あこがれ」という形で言われました。質問されてこう答えたんですね。「若者が育つ原動力はあこがれである。それがあれば言われなくても物凄く努力する」。これは新聞に載り、あるいは「毎日新聞」のコラムでも取り上げられました。石川啄木も処女詩集の題名は『あこがれ』でした。ですから、これは皆さん若者のある意味では特権と言っていると思いますが、私も、チェ・ゲバラとオードリー・ヘプバーンにあこがれてきました。

いままで、チェ・ゲバラとオードリー・ヘプバーンの生き方を対比してきました。そこには「あるべき姿」に対する熱い想いがありました。二人には、高い理想と強い信念がありました。こうした理想と信念を支えたものは何だろうか。私は、誠実だったと思います。この理想、信念と誠実、これが、私の最後の皆さんへのメッセージであります。皆さんは、これから社会へ出て行きます。私は、これから社会から出て行きます。皆さんの場合には、これからの未来がある。私の場合は、これまでの過去を振り返らなくてはならない。

是非、皆さん自身が決めた各々の「わが道」を生きて行ってほしい。時間が来てしまいました。私の最終講義を終わります。ありがとう！

(2009年1月15日)

(たかがけ ゆうじ 国際金融論, 途上国経済論)

※この拙い最終講義を、私の定年退職を見届けることなく病に倒れ、いまは宇宙の星と輝く妻・啓子(2008年7月17日、享年54歳)に、捧げる。